

オラシオ・キローガの短篇(1)

——ミシオネスとその自然——

田 中 敬 一

はじめに

パラグアイの作家オラシオ・キローガ (Horacio Quiroga, 1878-1937) が、初めてミシオネスの自然を知るのは1903年のことである。この年、ブエノス・アイレスに住むキローガは、レオポルド・ルゴネス率いるイエズス会伝道所調査隊に同行し、ミシオネスを訪れた¹⁾。そして手つかずの大自然、セルバに魅了される。

翌年、キローガは父の遺産を元手にアルゼンチン北東部の州、チャコで綿花栽培を手がける。しかしこの事業に失敗、ブエノス・アイレスに戻る。しばらくしてキローガはミシオネスに行き、今度はサン・イグナシオ (San Ignacio) に土地を購入、農夫として入植する (1906年)。このあとブエノス・アイレスの間を往き来する生活を始めるが、セルバを舞台にした短篇を次々に発表、1917年には『愛と狂気と死の物語』 (*Cuentos de amor, de locura y de muerte*) を出版した。

キローガの研究者で、彼の伝記を著したウルグアイの文学者エミール・ロドリゲス・モネガルは、キローガがミシオネスを舞台にした作品を発表するのは、彼が妻アナ・マリアと二人の子どもと一緒に暮らし始めた1912年頃と言う²⁾。そして彼の妻が自殺する1915年までサン・イグナシオに住み、治安判事 (juez de paz) や戸籍係 (oficial del Registro) を務めた。またこの時知り合った人々をテーマに描いた作品が『不毛の地』 (*El desierto*, 1924) であり、最高傑作と言われる『流れついた人々』 (*Los desterrados*, 1926) である。

そしてこれらの作品では、セルバの自然は背景として描かれるだけでなく、物語の展開で重要な役割を果たしている。本稿では「ミシオネスの物語」 *cuentos misioneros* と呼ばれる短篇を中心に、登場人物がセルバの自然とどのように向き合い、また作者はそれをどのように描いているか作品に沿って分析する。そしてキローガはミシオネスに対しどのような思いを抱

いていたか明らかにしたい。

1. キローガとミシオネス

今日、ミシオネスはアルゼンチンの東北部に位置し、突き出た形の一州であるが、かつてはパラグアイ領で、アルゼンチン、パラグアイ、ブラジル三国の係争の地であった³⁾。地理的にはラプラタ川水系の大河パラナ川上流部 (El Alto Paraná) に位置し、先住民グアラニー族の住む土地であった⁴⁾。気候は亜熱帯で、夏 (11月から3月) には最高気温は摂氏40度を越えるが、冬 (6月から8月) にはかなりの降雨 (年間降水量、1800-2000mm) があり、場所によっては降霜も見られる。

今日パラグアイとの国境となるパラナ川は、周辺住民の重要な交通手段となっている。州都ポサーダス (Posadas) は交通の要衝で、セルバで伐り出された木材の集散地として栄えた。またミシオネスのサン・イグナシオには植民地時代のイエズス会伝道所 (布教村) があり、その遺跡は今日貴重な観光資源となっている。

キローガはこの地に生涯2度に渡って生活する。一度目は1909年で、最初の妻アナ・マリアと結婚後、サン・イグナシオに移り住んだ。そして翌年には土地を購入し、マテ茶を栽培した。しかし1915年、妻アナ・マリアが自殺したのを契機にブエノス・アイレスに戻る。二度目は1932年、ウルグアイ領事としてサン・イグナシオに赴任したときである。しかし二番目の妻マリア・エレナは現地の生活になじめず、またウルグアイで政変が起こり領事職を一時辞め、1936年にブエノス・アイレスに戻った。

キローガは晩年、ミシオネスの魅力について、「ラ・ナシオン紙」に寄稿している⁵⁾。その中で彼はミシオネスを「地上の楽園」と呼び、自然 (セルバ) の美しさを称える一方、過酷な気象条件について次のように言及している。「地上の楽園——ミシオネスもその一つだが——にまで始源の呪いが達している。自然はあまりにも美しく、大地はあまりにも豊饒で、気候はあまりにも甘美だが、ひとたび暗い亡霊——厳しい霜、洪水をもたらす雨、過酷な干魘——が現れると、ミシオネスでの生活はそれをどうにかして克服しないかぎり、無意味であることを私たちに思い起こさせる。」⁶⁾

そしてキローガの作品に登場するほとんどすべての人が、この牙を剥いた自然の中で高い代償を払わされる。「葦葦きの家」“Tacuara-Mansión”で

は、泥酔したリベットは、フアン・ブラウンの家の前にある大木の下で眠り込み、翌朝寒さで凍え死んだ。「香木の屋根」“El techo de incienso”の主人公オルガスは、嵐で増水したパラナ川で悪戦苦闘する。また「流れついた人びと」“Los desterrados”では、ミシオネスに亡命した二人のブラジル人元兵士が故郷に帰ろうと、高熱と疲労の中セルバの密林を進むが、祖国を目前に力尽きる。

このようにセルバはキローガの多くの作品で、大きな障害となって彼らの行く手を阻む。次章ではセルバの過酷な自然がどのように描かれ、またプロットの中でどのような役割を果たしているか、次章では作品に沿って見ることにする。

2. セルバの脅威

(1) パラナ川

パラナ川は流程1,800kmで、アマゾン川に次ぎ南米第2の大河である。ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチンを通り、ウルグアイ川と合流しプラタ川となる。ミシオネスではアルゼンチン、パラグアイ、ブラジル三国間の自然の国境となっているが、ひとたび増水するとパラナ川は人々の生活を脅かし、命の危険さえともなう。

先に紹介した「香木の屋根」の主人公オルガスはサン・イグナシオに住む住民登録係りである。彼は自宅の屋根の修理にあけくれ、公務をおろそかにしていた。しかしある日のこと査察を受け、彼の怠慢が発覚する。そしてポサーダスに滞在する査察官のところへ、完全な形にした住民台帳を届けようとする。オルガスはパラナ川をカヌーで下るが、途中波風が強くなり、彼の行く手を阻む。キローガはその様子を次のように描写している。「運河を進むと船足が速まった。オルガスはできるかぎり運河を進もうとした。しかし風が強くなり、パラナ川はカンデラリアとポサーダスの間、川幅が増し、海のようになり、狂ったような大波がうち寄せてきた。オルガスは船縁を打ち、カヌーを水浸しにする水から台帳を守ろうと、その上に腰かけた。」⁷⁾そしてオルガスはびしょ濡れになりながらも、何とか約束の時間までに台帳を届けることができた。

『愛と狂気と死の物語』所収の短篇「契約労働者」“Los mensú”は、ポサーダス周辺の伐採場 (obraje) で働く契約労働者 (mensú)⁸⁾の過酷な生活が

描かれている。この作品に登場するカエタノとポデレイは、前借りをボサーダスの町で散財したあと、伐採場の仕事に向かう。そしてポデレイはマラリアにかかるが、雇い主は仕事を続けることを強要する。そこで二人は逃亡を決意し、筏に乗ってパラナ川を下る。しかし20時間降り続いた雨で川は増水し、またポデレイの疲労も限界に達していた。キローガはポデレイの最期を冷徹な目で描いている。

Desde allí, y de atrás, acechó a su compañero; pero Podeley yacía de nuevo de costado, con las rodillas recogidas hasta el pecho, bajo la lluvia incesante. Al aproximarse Cayé alzó la cabeza, y sin abrir casi los ojos, cegados por el agua, murmuró:

—Cayé ... caray ... Frio muy grande ...

Llovió aún toda la noche sobre el moribundo, la lluvia blanca y sorda de los diluvios otoñales, hasta que a la madrugada Podeley quedó inmóvil para siempre en su tumba de agua.⁹⁾

彼 [ポデレイ] はふり返っては仲間を待った。しかしポデレイはふたび横になり、降り続ける雨の中、両膝を胸に抱えこんだ。カエタノが近づくと、水で見えなくなった目をかすかに動かし、つぶやくように言った。

「カエ、どうしたんだろう……。とても寒いんだ……」

そのあと夜通し、秋の大雨の白く、こもった音の雨が瀕死の男の上に降り注いだ。そして明け方になると、ポデレイは水の墓の中で、じっと動かなくなっていた。

この作品では、増水したパラナ川は登場人物の死の直接の原因にならないまでも、重要なファクターとなっている。

(2) 太陽

キローガの作品に最もよく登場する過酷な自然条件は灼熱の太陽である。「ある日雇い」“Un peón”は、語り手の「私」とそのもとで働くことになったブラジル人青年オリベラの交流を描いた作品である。そのなかでオリベラは次のように話している。「見て下さいな、おいらがどのよ

うにしてジャガイモを育てるのを学んだか。この国じゃ、野菜はアイロンに触れたときのようにすぐに枯れ、金色の蟻は3秒で、サンゴヘビは20秒で死んでしまうんだ。」¹⁰⁾また同じ作品の中、語り手は炎天下の午後を次のように表現している。「午後の2時半だった。その時間は特に卒中が起りやすく、太陽の下10分間放置されていた木の取っ手は掴むこともできなかった。」¹¹⁾

「死んだ男」“El hombre muerto”では、バナナ農園の鉄条網を越えようとした男が、木の皮に足をすべらせ、持っていたマチェテで自らを刺し貫く物語である。身動きできなくなった男は、自分が今どのような状態にあるのか自問する。「いったいどうしたと言うんだ。これはミシオネスのいつもの正午ではないのか。ミシオネスの山の、囲い場の、広大なバナナ園の。確かにそうだ！ 丈の短い牧草、蟻塚、静けさ、真上の太陽。」¹²⁾

この「真上の太陽」el sol a plomo という表現はキローガの作品でしばしば使われる表現である。キローガは「平手打ち」“Una bofetada”（『未開人』所収）でもこの表現を用い、強烈な太陽のもと、過酷な労働に従事する伐採場の労働者を次のように描いている。

Hacia ese día mucho calor. Entre la doble muralla de bosque, el camino rojo deslumbraba de sol. El silencio de la selva a esa hora parecía aumentar la mareante vibración del aire sobre la arena volcánica. Ni un soplo de aire, ni un pio de pájaro. Bajo el sol a plomo que enmudecía a las chicharras, la tropilla aureolada de tábanos avanzaba monótonamente por la picada, cabizbaja de modorra y luz.¹³⁾

その日はとても暑かった。森の二重の塀の間、赤い土道は太陽の光をまぶしく反射していた。その時間、セルバの静けさは、火山性の砂の上でむかつくような大気の震動を助長させるようだった。風もなく、鳥の鳴き声もきこえなかった。セミの鳴き声を黙らせる真上の太陽のもと、蛇が群れをなしてあとを追う一団が、眠気と日の光で顔を下に向け、黙々と小径を進んでいった。

引用文中の「赤い土道」el camino rojo とはパラグアイによく見られる土壌「テラ・ロッサ」で、作者はセルバの茹だるような暑さを大気や小動物の

微かな動きを通して見事に描いている。

(3) 動植物

キローガはセルバに棲む生き物を数多く作品に描いている。『セルバの物語』は子ども向けに書かれた短篇集で、蛇、亀、蜜蜂といった動物が物語の語り手となっている。『流れついた人たち』に収録されている最初の短篇「アナコンダの帰還」“El regreso de Anaconda”はこの流れをくむ動物コントである。作者はこの作品でセルバに棲む蛇たちの平和な世界が、侵入してきた人間たちによって破壊される様を、蛇たちの目を通して描いている。またセルバに棲む動物の世界は理想化されて描かれており、作者の生き物に対する深い同情と、慈しみが読みとれる。

しかしながら現実世界において、人間と人間に危害を及ぼす怖れのある動物が平和理に共存することは難しい。とりわけ毒蛇は噛まれれば命に関わり、ミシオネスの住民にとって最大の脅威の一つである。「ある日暑い」では、家政婦のシリラが毒蛇に噛まれるエピソードが挿入されている。語り手の「私」は、シリラが蛇を目撃した2日前に、「同じ場所で、私のフォックス・テリアーはウズラを追っているとき鼻面を噛まれ、わずか17分で死んでしまった」¹⁴⁾と記している。

そのあと「私」は懸命にシリラの治療に当たる。

Examiné la mordedura, en la base del tendón de Aquiles. Yo esperaba ver muy juntos los dos clásicos puntitos de los colmillos. Los dos agujeros aquellos, de que aún fluían babeando dos hilos de sangre, estaban a cuatro centímetros uno de otro; dos desos de separación. La víbora, pues, debía de ser enorme.

Cirila se llevaba las manos del pie a la cabeza, y decía sentirse muy mal. Hice cuanto podía hacer; ensanche de la herida, presión, gran lavaje con permanganato, y alcohol a fuerte dosis.

Entonces no tenía suero; pero había intervenido en dos casos de mordedura de víbora con derroche de caña, y confiaba mucho en su eficacia.¹⁵⁾

私はアキレス腱の付け根にある噛み傷を調べた。私は毒牙の二つの跡がもっと接近しているものと期待していた。その傷跡からは、血がふた筋滲み出していたが、片方の傷からもう一方まで4センチ、すなわち指2

本分離れていた。毒蛇は巨大な蛇に違いない。

シリラは手を足から頭に持っていったのは、胸が苦しいと言った。私はできるかぎりのことをした。傷口を広げたり、圧迫したり、過マンガン酸塩と、かなりの量のアルコールで傷口を洗った。

その時、血清はなかった。しかし以前、2度毒蛇に噛まれたときも焼酎を沢山使ったが、私はこの効果を信じていた。

この分析的で、細密な描写には、19世紀後半ラテンアメリカを席卷した実証主義の影響がうかがえる。

人間に危害を与えるのは動物に限らない。『愛と狂気と死の物語』に収められている「羽根枕」“El almohadón de pluma”では、鳥に寄生するダニが登場する。物語の中、新妻アリシアはこの害虫に夜な夜な血を吸われ、遂には衰弱死する。そして語り手は次のように述べ、物語を締めくくっている。「こうした鳥の寄生虫は通常ならごく小さなものであるが、ある条件の下で巨大化することがある。人間の血はこうした生き物にとって大好物で、羽根枕の中に見つけたとしても不思議ではない。」¹⁶⁾

『不毛の地』の中でもこうした害虫が登場する。同名の短篇「不毛の地」“El desierto”は、妻を失った男スベルカサウがセルバの中で二人の子どもを育てる話で、作者の自伝的な物語となっている。この作品の中、食事のあとで父親が息子の足についた砂ノミをとる場面が出てくる。物語の語り手(キローガ)は砂ノミの害について次のように説明している。「一般に砂ノミは毒ヘビやハエの幼虫、ブヨよりも害は少ないと言われる。砂ノミは皮膚をまっすぐよじ登ると、突然、猛烈なスピードで穴を開け、真皮にまで達すると小さな袋を作り、そのなかに卵を産む。砂ノミを除去するのも、卵を取りだすのも痛くはなく、その傷も大きく腫れることはない。しかし10匹の砂ノミのうち1匹は炎症を引き起こすものがある。これには注意しなければならない。」¹⁷⁾

3. キローガの自然描写

この章ではキローガの自然描写の特徴について、『愛と狂気と死の物語』所収の「波間に漂って」“A la deriva”を例に分析する。この作品は毒蛇に噛まれた男(パウリーノ)が、近くの町、タクラ・プクに住む親戚のガオ

ナを頼り、パラナ川をカヌーで下る物語である。「パウリーノは舳先に座り、櫂を漕いでパラナ川の真ん中まで出た。川の流れは、イグアスのあたりでは時速6マイルで、タクラ・プクまでは5時間以内で着けるだろう。」¹⁸⁾

このあと作者は、毒が回り異変の生じたパウリーノの体を克明に描写する。「その足は太股のまん中あたりまで変形し、硬い肉の塊となり、ズボンは張り裂けそうであった。男は縛っていた布を切り、ナイフでズボンを引き裂いた。すると下腹部が飛び出し、そこには大きな紫斑が浮き出ている。激痛が走った。」¹⁹⁾

その後一人ではタクラ・プクまで辿りつけないと思ったパウリーノは、ブラジル側の岸に船を着け、代母のアルベスに助けを求めるが、彼女に会えなかった。そこでふたたびカヌーで川を下る。作者の自然描写を見ることにしよう。

El Paraná corre allí en el fondo de una inmensa hoya cuyas paredes, altas de cien metros, encajonan fúnebremente el río. Desde las orillas bordeadas de negros bloques de basalto, asciende el bosque, negro también. Adelante, a los costados, detrás, la eterna muralla lúgubre, en cuyo fondo el río arremolinado se precipita en incesantes borbollones de agua fangosa. El paisaje es agresivo, y reina en él un silencio de muerte. Al atardecer, sin embargo, su belleza sombría y calma cobra una majestad única.²⁰⁾

パラナ川はそのあたり、深い谷間の底を流れ、高さ百メートルもある壁は川を不吉に押し込めていた。黒い玄武岩のかたまりに縁どられた川岸から、同様に黒い森が高く広がっていた。前方と、両側と、後ろにはともまでも続く陰鬱な岩壁が見え、その下で渦巻く川は、絶えず泥のような泡を生み出していた。景色は襲いかかってくるようで、そこは死の沈黙が支配していた。しかし夕暮れ時になると、その暗くて静かな美しさは、他には見られない荘重さ湛えていた。

この不気味で、陰鬱なパラナ川の描写はパウリーノの運命を暗示するかのようで、アメリカの作家ポーの短篇を彷彿とさせる幻想的な情景描写である。

このあとパウリーノはタクラ・ククのガオナや、かつて働いていた伐採

場の主人ミスター・ドウガルドを思い出す。そして彼がほっと安らぎを覚えたとき、作者はそれに呼応するかのようにはパラナ川を描く。それは夕暮れ時に一瞬見せる、静謐で、厳かな美しさに包まれたパラナ川であった。

¿Llegaría pronto? El cielo, al poniente, se abría ahora en pantalla de oro, y el río se había coloreado también. Desde la costa paraguaya, ya entenebrecida, el monte dejaba caer sobre el río su frescura crepuscular, en penetrantes efluvios de azahar y miel silvestre. Una pareja de guacamayos cruzó muy alto y en silencio hacia el Paraguay.

Allá abajo, sobre el río de oro, la canoa derivaba velozmente, girando a ratos sobre sí misma ante el borbollón de un remolino.²¹⁾

もうすぐ着くのだろうか？ 空は、西の方、金色のスクリーンとなって開き、川も赤みを帯びていた。すでに暗くなったパラグアイ側の岸から、山はその黄昏時の涼しさを、柑橘類の花と野生の蜜の強い香りのするなか、川面に投げかけていた。コンゴウインコのつがいが高空高く、静かにパラグアイ側へと渡っていった。

下の方、金色に輝く川面では、カヌーが渦巻く流れに何度か回転しながら、かなりの速度で波間を漂っていた。

金色に染まる空、夕日を反射する川面、花と蜜の香り、作者は五感に訴え黄昏時のパラナ川を描くが、この印象主義的な描写は、キローガがモデルニスモの作家に戻ったかのような印象を与える。このあと物語では、パウリーノは波間に漂いながら息を引き取る。

4. おわりに

キローガは、先に紹介した「ラ・ナシオン」紙の記事の中で、ミシオネスに魅せられ、この地に住みついた外国人を紹介している。一人はポサーダスの会社で簿記を担当したフランス人で、1924年に亡くなった。もう一人はラプラタ大学を卒業した技師で、短期間の潜在がすでに30数年に及んでいるという。そしてキローガは「二人は、『大渦』の主人公同様、理由は異なるにせよ、セルバに飲みこまれた」²²⁾と記している。一方キロー

方は、ミシオネスに住みついた人種、国籍の異なる様々な人々を彼の作品に描いている。そしてこれまで見たように、彼らの多くはミシオネスの濃密で、圧倒的な自然の前でなす術もなく、「飲みこまれ」ていった。これは見方を変えれば人間に対する自然の勝利であり、後の「大地小説」*novela de la tierra* の先駆けであるという指摘もうなずける²³⁾。

そしてキローガはこのミシオネスの自然美を見出した、ラテンアメリカ最初の作家であった。しかもキローガの描く自然は、すでに見てきたように多くの作品においてその背景となり、登場人物の運命を暗示したり、あるいは運命そのものを左右する重要な役割を担っていた。しかしながら自然描写そのものが作品のテーマではない。作家の目はあくまでも登場人物に向けられており、彼らはミシオネスの自然のなかで生活し、格闘し、そしてある者は死んでいった。

キローガは死の前年にあたる1936年、親友の作家マルティーネス・エストラーダに宛てた手紙の中で次のように語っている。「明日、明後日にでも、わたしは自然がもたらす深い眠りに、この上なく安らかな休息を見出すことだろう。しかしこの気持をわたしの悲観主義と取らないでほしい。わたしは自分が死ぬ日は、植物に水をやったり、植えたりしながら死ぬのだ。わたしは、わたしたちにとって曖昧だが、確かに存在する法律や調和と共に、自然と一体になるにすぎない。」²⁴⁾

この手紙には、そう遠くない死を予感した作者の、ミシオネスの自然の中で人生を終えたいという願いと憧れが読みとれる。キローガにとってミシオネスとは彼の生活の場 (*habitat*) であり、彼の作品の舞台 (*escenario*) であった。そして彼は「ミシオネスの物語」に登場する人物と同様、ミシオネスを愛し、そこで生涯を終えたいと願っていた。

(了)

註

- 1) 17世紀初め、イエズス会士はグアラニー族の布教のため、伝道所(布教村)を建設した。しかし1767年のイエズス会追放令とともに衰退。ミシオネスのサン・イグナシオにはその遺跡が残っている。レオポルド・ルゴネス(Leopoldo Lugones, 1874-1938)はアルゼンチンの近代派詩人。
- 2) Emir Rodríguez Monegal, *Las raíces de Horacio Quiroga*, pp. 12-13.

- 3) かつてミシオネスはパラグアイ領であったが、三国同盟戦争 (1865) のち和平協定 (1876) が結ばれ、アルゼンチン領となった。
- 4) グアラニー族はかつてパラグアイ、アルゼンチン、ブラジルの一部に広く住んでいたが、今日は人口が激減し、これら3国の国境地帯に2万人から3万2千人住んでいる。キローガの作品には、グアラニー語起源の地名や言葉がしばしば登場する。
- 5) 1931年1月1日付け「ラ・ナシオン」La Nación 紙に掲載された記事、「ミシオネスの生活」“La vida en Misiones”。
- 6) *Obras inéditas y desconocidas*, Tomo VI, p. 100.
- 7) “El techo de incienso” en *Cuentos* (Selección y prólogo de Emir Rodóriguez Monegal, Biblioteca Ayacucho), p. 237. 以下、本稿において作品の引用はこの作品集に拠るものとする。
- 8) 〈mensú〉とはマテ茶の畑 (yerbal) や森林伐採場 (obraje) で働く契約労働者を言うが、実際はその多くが債務奴隷化していた。〈mensú〉とはスペイン語の〈mensual (月払い)〉に由来する。
- 9) “Los mensú” en *Cuentos*, p. 119.
- 10) “Un peón” en *Cuentos*, p. 130.
- 11) *Ibid.*, p. 132.
- 12) “El hombre muerto” en *Cuentos*, p. 192.
- 13) “Una bofetada” en *Cuentos*, p. 123.
- 14) “Un peón” en *Cuentos*, p. 137.
- 15) *Ibid.*, p. 137.
- 16) “El almohadón de pluma” en *Cuentos*, p. 37.
- 17) “El desierto” en *Cuentos*, p. 245.
- 18) “A la deriva” en *Cuentos*, p. 79.
- 19) *Ibid.*, p. 79.
- 20) *Ibid.*, p. 79.
- 21) *Ibid.*, p. 80.
- 22) *Op. cit.*, p. 98. 『大渦』*La vorágine* はコロンビアの作家ホセ・エウスタシオ・リベラ (José Eustacio Rivera, 1888-1928) が1924年に書いた小説。この作品を契機に、ラテンアメリカの圧倒的な自然をテーマにした一連の小説、「大地小説」が現れた。
- 23) Leonor Fleming, “Introducción” de *Cuentos* (REI, 1992), p. 31.
- 24) *Cartas inéditas de Horacio Quiroga*, Tomo I, p. 103.

参考文献

- Bartosevich, Nicolás A. S., *El estilo de Horacio Quiroga en sus cuentos*, Editorial Gredos, 1973
- Flores, Angel, *Aproximaciones a Horacio Quiroga*, Monte Avila Editores, 1976
- Gabriele Reck, Hanne, *Horacio Quiroga, Bibliografía y crítica*, Ediciones De Andrea, 1966
- Martínez Morales, José Luis, *Horacio Quiroga: Teoría y práctica del cuento*, Universidad Veracruzana, 1982
- Quiroga, Horacio, *Obras inéditas y desconocidas*, Tomo VI, Arca, 1969
- *Cartas inéditas de Horacio Quiroga*, Instituto Nacional de Investigaciones y Archivos Literarios, Tomo I y II, Montevideo, 1959
- *Cuentos* (Edición de Leonor Fleming), REI, 1992
- Rodríguez Monegal, Emir, *Las raíces de Horacio Quiroga*, Ediciones Asir, 1961
- *El desterrado, Vida y obra de Horacio Quiroga*, Editorial Losada, 1968

(テキスト)

- Quiroga, Horacio, *Cuentos* (Selección y prólogo de Emir Rodóriguez Monegal), Biblioteca Ayacucho, 1981